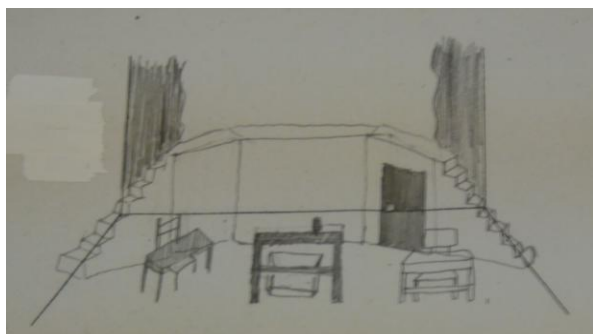


尾北高等学校

東京ローズ 私の言葉に翼が生えて 作:郷原 玲

◇概要◇

昭和16年、日系2世の米国人であるベティは、両親の故郷日本を訪れるが戦争が始まり帰国できなくなってしまう。やむを得ず仕事を探し、ようやく見つけた仕事は対米謀略放送のアナウンサーであった。太平洋戦争当時、「ラジオ放送」という形で戦った女性たちの結末は…。



舞台概要 (たいへん大きなセットでした)

◇メッセージカードより◇

- ・同じ女性として、日本で戦う三人の女性たちに共感できる部分が多くあり、理不尽な世の中で戦う女性の強さをとても感じました。
- ・同じ洋子さんが自分のミドルネームを言う場面でも、途中と最後でこんなに印象が違うのだと驚きました。一つの舞台セットで、二つの国を同時に表現していたのを面白いと感じました。
- ・本当に魅力的な役者さんばかりで、とてもときめきました。日本とアメリカ、戦争の歴史、戦時下の心情に深く寄り添っていて、笑いあり、涙あり、最期まで飽きることなく楽しませていただきました。
- ・戦争否定の劇が多い中、人知れず戦っている女性たちにスポットが当たっていてとても魅力的に思いました。
- ・個性を表情や喋り方、所作で表していて、すごかったです。戦争を違う視点で笑いを交えて演じていて、見やすかったです。

◇楽屋インタビュー◇

Q1. この脚本を選んだのは何故ですか？

A. 部員全員で選ぶ形式をとっていて、戦争を新たに今までとは違う方向から見ることを前提としていたからです。

Q2. 東京ローズを演じる上で工夫した点は？

A. 日本人でない日系二世を演じるため、行動や仕草などで国境の差を出す事を重要視しました。

Q3. 演出で大切にしたいことは？

A. キャストの意見を聞き、どう演出するかをすり合わせたりするなどを重視しました。また、照明では日付の変化を、音響では時代を感じる実際の音源を入れるなどの工夫を凝らしました。

Q4. 最後のシーンについて教えてください。

A. 最後にノックしたのは、GHQの人で、GHQによって東京ローズが逮捕されることを表しています。表だって出したい事ではなかったのですが、英語で表現して伝わる人に伝わってほしいと思います、あのような演出にしました。



【速報担当】秋田 実咲 石田 唯(高志)

※ 尾北高等学校のみなさん お疲れ様でした！！